



<https://www.facebook.com/jandost99>

今からちようど

一〇〇年前、第一世界大戦に勝利した英仏は旧オスマン帝国領、東地中海のアラブ地域を植民地分割する。その結果、クルディスタンは、トルコ、イラン、イラク、シリアという四つの国民国家によって分割・分断された。重層化された植民地主義の歴史が生み出した多国間植民地である。

本作の著者、ジャン・ドスト (Jan Dost) は、一九六五年、トルコ国境に近いシリア領クルディスタンの街、コバニに生まれたクルド人の詩人・作家・翻訳家だ。英仏植民地主義帝国によって恣意的に引かれた国境線によりドストはシリア人とされ、アラビア語を国語として修得することとなる。国境があと数キロ南だったら、今ごろ自分はトルコ人としてトルコ語を話していただろうとドストは言う。

クルド語詩人として活躍する傍ら、コバニの学校で自然科学を教えていたドストは二〇〇〇年、欧州に亡命、現在はドイツに暮らす。同じくドイツに亡命し作家となったシリア人、ラフィーク・シャミー（ラフィク・シャミ、一九四六年―）がもつぱらドイツ語で著述するのは対照的に、ドストの創作言語は一貫して母語のクルド語やアラビア語だ。

二〇〇四年に刊行された『ミジユダバード (Mijudabad)』以来、最新作の『クルディシブス (al-kurdistis)』(二〇二〇年)まで、ドストはこれまでに十二の長編小説を著している。最初の四作品はクルド語で書かれ（本作を含む二作品は作者自身の手でアラビア語に訳された）、五作目の『翻訳者アシーク (Asiq al-muawjim)』(二〇二二年)以降は、すべてアラビア語で書かれている。折り重なる植民地主義の歴史の結果、自らに強制されたアラビア語という言語で書くことについて、ドストは次のように語る。

「言語的追放（母語ではないアラビア語で著述すること）は、素晴らしく、好ましい追放だと言えます。私は圧力を受けて、アラビア語で書いているわけではありません。アラビア語に寄せる愛ゆえに、このことばで書いているのです。幼い時から私はアラブ文学に浸ってきました。アラビア語という、この魅力に満ちたことばを私は愛しています。それは、私のことばク

ルド語を育む乳だったのです。アラビア語は私の一部です。（中略）私はアラビア語を裏切りたくありません。私自身の一部を裏切りたくないのです。私のことばクルド語で表現するようにアラビア語でも表現したい。私は美しい作品を生み出したい、クルドの痛みをアラビア語で伝えたいのです」

歴史的に俯瞰すれば、アラビア語を自身の存在の一部として生きることが、植民地主義の時代のはるか以前から、この地のエスニック・マイノリティの知識人にとってごく自然なことだった。ドストは、十七世紀のクルド人詩人にして学者、神秘主義者、そしてクルド・ナシヨナリストでもあったアフマド・ハーニーの『メムとゼーン』——クルドの民族叙事詩とされる——をアラビア語に翻訳しているが、自らの母語を育む乳であったアラビア語の世界に、クルドの民族的魂を贈り届けようとする彼の営みは、アフマド・ハーニーがそうであったように、母語とアラビア語のそれぞれの言語文化的伝統の往還のなかで知を紡いだ中世のアラブ・イスラム世界のクルド人知識人の生のありようの、現代における実践であると言える。そのアフマド・ハーニーを主人公とするポリフォニックなミステリー小説『ミールナーメ (Mirname)』(二〇〇八年、クルド語)や本作をはじめ、ドストの作品には、オスマン帝国時代の中東世界

を舞台にした歴史小説が多い。他民族が共生していた想像の帝国への郷愁というよりも、近代のネイションに貧しく、かつ暴力的に分断された「今」とは違う別の世界、別の人間のありよう、多元的な世界の可能性を文学を通して提示しているのだと思う。

本作『幸福なマルティン (Martin al-sarid)』(二〇一一年)は、原著はクルド語。著者自身がアラビア語に翻訳したものを日本語に訳した。十八世紀初頭、ドイツの片田舎に暮らす青年マルティンが『幸福の秘薬の効用の書』なる幻の書物を求め、オリエントを遍歴する歴史小説である。ここではその第一章を訳出した。オスマン帝国に対する西洋の侵食が始まる契機となるカルロヴィッツ条約締結場面から始まり、主人公が東方世界に立出するまでの経緯が描かれている。

続く第二章冒頭では、すでに九年九か月と九日が過ぎ去り、マルティンの帰郷場面となる。親友グスタフも、マルティンが村を出たあとすぐアフリカへ旅立ち、マルティン帰郷の前日に村に戻ってきていた。再会した二人は今は亡きハンスの宿に赴き、グスタフが滔々とアフリカの体験談を語り始める。睡魔に襲われたマルティンが部屋に退くと、グスタフは食堂にいたスペイン人の青年相手に話を続ける。一方、マルティンが食堂に置き忘れた手稿を投宿してい

た神学生が見つつけ、部屋に持ち帰る。そこには、マルティンのオリエント体験の回顧録が綴られていた。こうしてグスタフが食堂で語るアフリカにおける奴隷狩りの物語——それは、近代西欧がいかにして現代世界の覇者たる巨万の富を築きあげたかという「黒歴史」の物語である——と、神学生が読むマルティンのオリエントの物語が交互に語られてゆく。人間の幸福とは何かという哲学的探求のためにオリエントに赴いたマルティンだったが、アレppoで財をなし、肉欲に溺れ、やがてその重い代償を想像だにしなかつた形で支払うことになる。

叙述の大半は、小説的デイスコースではなく、グスタフが語る話とオリエントでの生を回顧して綴ったマルティンによる一人称の書き物という物語的なナラティヴで構成されている(著者は「原注」を随所に施し、本文では掘り下げられないその他の登場人物たちの逸話を挿話的に注記し、小説に厚みをもたせている)。こうした物語的叙述とは対照的に、本作で著者が提起する問はずぐれて現代的なものだ。とりわけ、自分たちこそが絶対的に正しい、自分たちこそが真理であるとする宗派主義のドグマとその不寛容に対する批判が全編を貫く。宗派主義の暴力の行き着く先の悲惨は、マルティンが逃亡の果てに遭遇する「修羅」として、作品の壮絶なクライマックスを構成する。従来、宗派主義は

中東イスラーム世界に内在する文化的本質であるかのように見なされてきた。IS(イスラーム国を名乗る武装組織)の暴力がただちに想起されるかもしれないが、マルティンの物語と並行して語られるグスタフの物語には、西洋による惑星規模の植民地化の暴力もまた、西洋中心主義というある種の「宗派主義」にほかならないという著者の文明的批判がこめられている。